

いる(図1-2-5-10)。

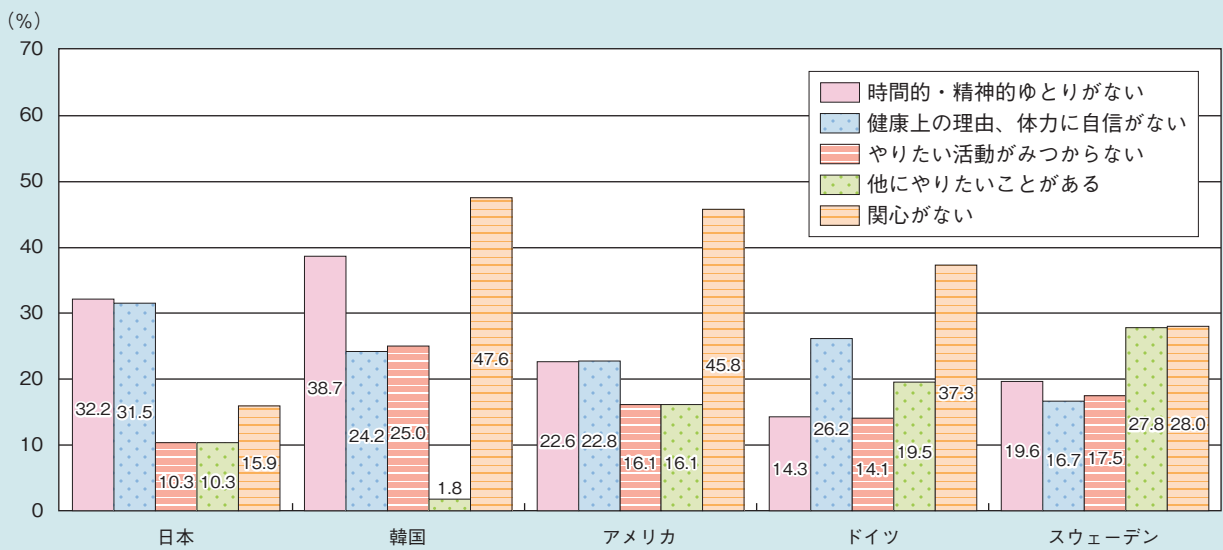
また、若い世代との交流の機会への参加意向についてみると、参加したいと考える人の割合(「積極的に参加したい」、「できるかぎり参加したい」と回答した人の計)は平成20年(2008)で62.4%となっており、初めて6割を超えた(図1-2-5-11)。

6 高齢者の生活環境

(1) 高齢者の住環境

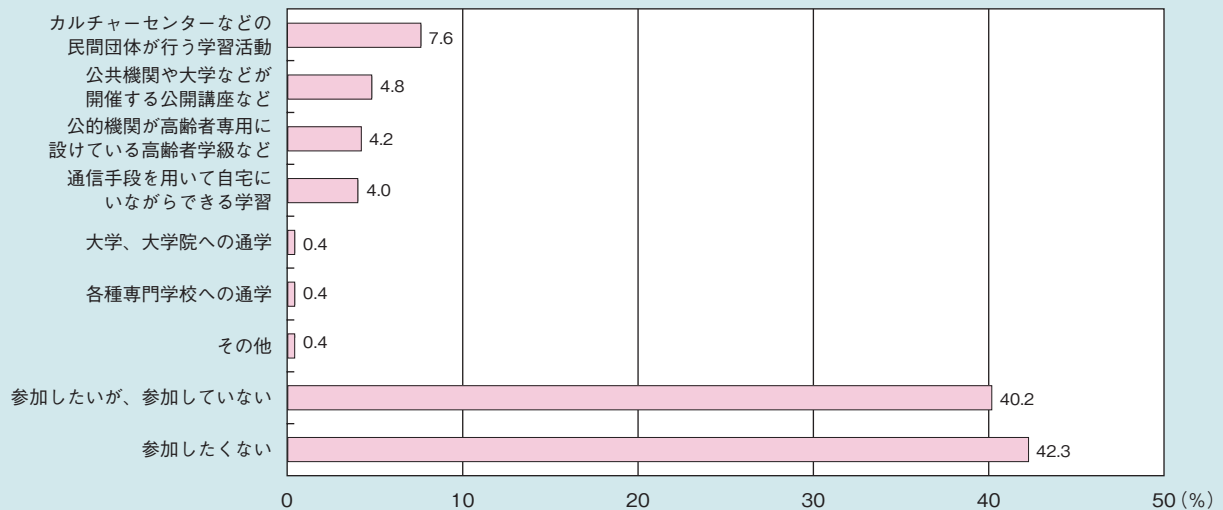
ア 高齢者の9割は現在の住居に満足しており、体が弱っても自宅に留まりたい人は7割弱
60歳以上の高齢者に現在の住宅の満足度について聞いてみると、「満足」又は「ある程度満足」

図1-2-5-8 ボランティア活動その他の社会活動に参加しない理由(複数回答)



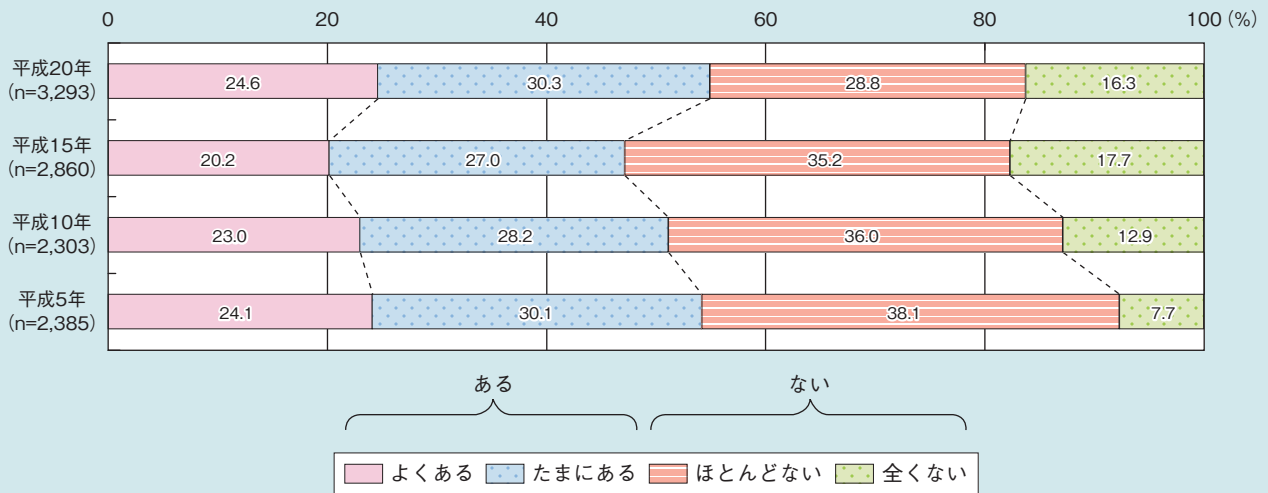
資料：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」(平成22年)
(注) 調査対象は、60歳以上の男女

図1-2-5-9 高齢者の学習活動への参加状況(複数回答)



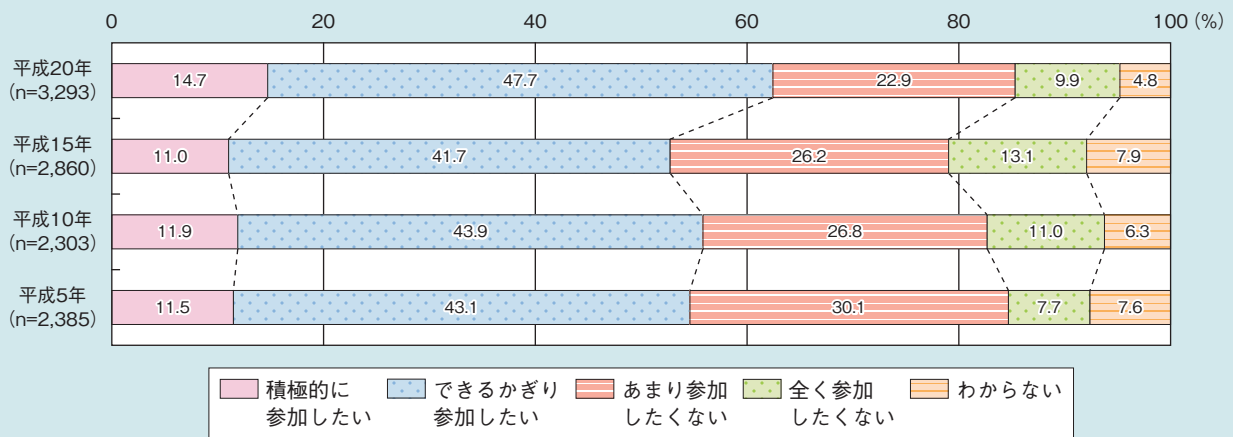
資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」(平成20年)
(注) 調査対象は、全国60歳以上の男女

図1-2-5-10 世代間交流の機会の有無



資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」(平成20年)
 (注) 調査対象は、全国60歳以上の男女

図1-2-5-11 若い世代との交流の機会の参加意向



資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」(平成20年)
 (注) 調査対象は、全国60歳以上の男女

している人は総数で89.3%、持家で91.2%、賃貸住宅で69.9%となっている(図1-2-6-1)。

さらに、同調査で現在住んでいる住宅について不満な点をみると、不満の理由は「住宅が古くなったりいたんだりしている」が16.8%、以下、「庭の手入れが大変」が10.5%、「住宅の構造や設備が使いにくい」が7.0%となっているが、「特に不満はない」が61.4%となっている。

60歳以上の高齢者が、身体が虚弱化したときに望む居住形態についてみてみると、「自宅に留

まりたい」(「現在のまま、自宅に留まりたい」と「改築の上、自宅に留まりたい」の合計)とする人が約3分の2となっているが、韓国、アメリカ、ドイツ、スウェーデンと比較すると、スウェーデンに次いで低い数字となっている。また、自宅に留まりたい人の中でも「改築の上」で留まりたいとする人の割合は、日本は韓国に次いで低いが、5年前と比較するとやや上昇している(図1-2-6-2)。

イ 高齢者は家庭内事故が多く、最も多い事故時の行動は「歩いていた（階段の昇降を含む）」

全国20の危害情報収集協力病院から提供された事故情報では、65歳以上高齢者の方が20歳以上65歳未満の人より住宅内での事故発生の割合が高く、65歳以上高齢者の事故時の場所別・行動別にみると、場所では、「居室」25.8% (1,072件)、「階段」13.1% (543件)、「台所」11.9% (495件)が多く、行動では、「歩いていた（階段の昇降を含む）」が最も多く29.0%と3割近くを占める

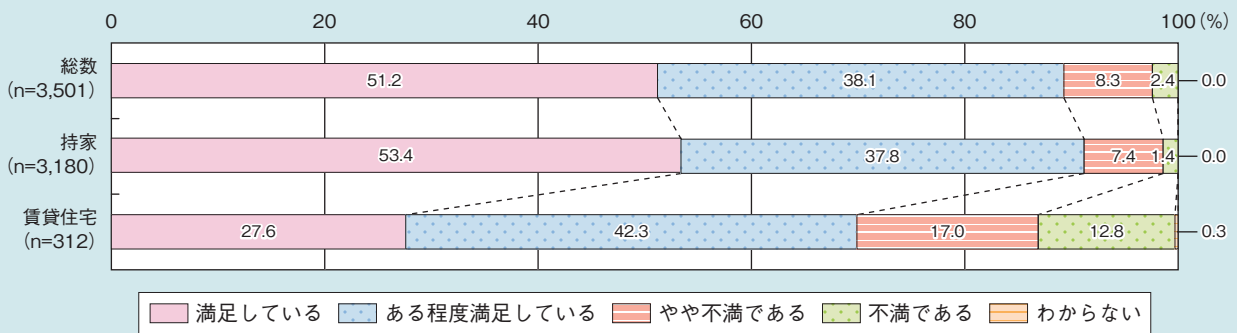
(図1-2-6-3)。

(2) 高齢者の安全・安心

ア 高齢運転者による交通事故件数が高い水準で推移

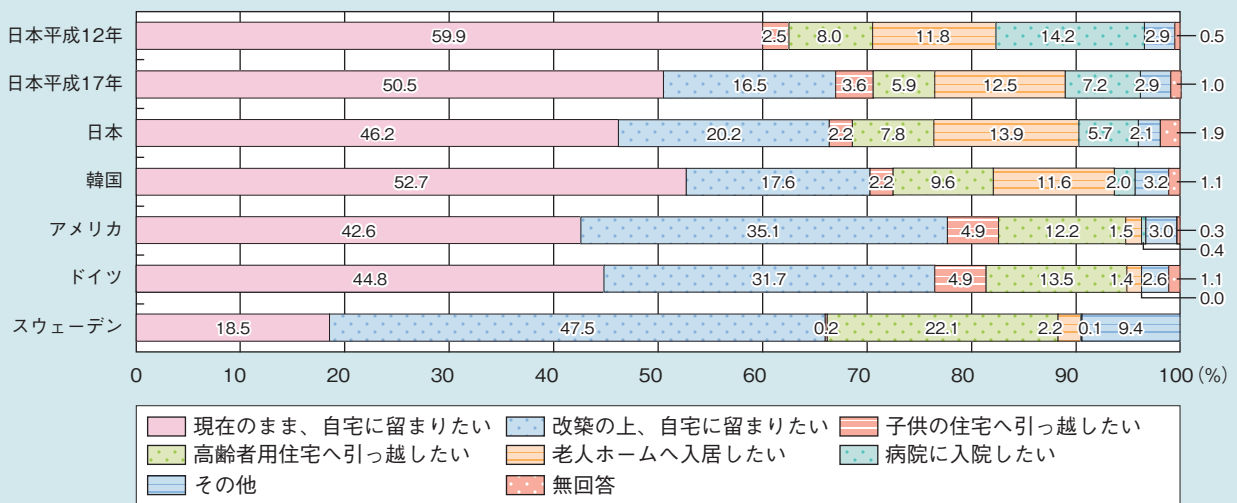
65歳以上の高齢者の交通事故死者数をみると、平成22(2010)年は2,450人で14(2002)年より減少しつつあるが、交通事故死者数全体に占める割合は年々上昇しつつあり、22(2010)年は50.4%と統計が残る昭和42(1967)年以降で最も高くなっている。ただし、高齢化の影響によ

図1-2-6-1 現在の住居に関する満足度



資料：内閣府「高齢者の日常生活に関する意識調査」(平成21年)
 (注) 持家と賃貸住宅の回答者数と総数の差 (n=9) は給与社宅等。

図1-2-6-2 虚弱化したときに望む居住形態



資料：内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」(平成22年)
 (注) 調査対象は、60歳以上の男女